

GLOBAL DIALOGUE

2.1

グローバル・ダイアログ：国際社会学会ニュースレター
第2巻 第1号 (2011年10月号)

The Return of Class

階級の再来

Göran Therborn

The (Non)Citizens of Komtar

Komtar の(非)市民たち

Aya Fabros

The Chaos of Order

秩序のカオス

Boaventura de Sousa Santos

- > The Hegemony of English
英語のヘゲモニーと社会科学
- > National Sociologies: Peru and Romania
世界の社会学：ペルーとルーマニア
- > Ulf Himmelstrand, 1924-2011
ウルフ・ヒンメルストランド(1924-2011)
- > History Corner: The Inclusion of Women
ヒストリー・コーナー：女性の包摂
- > Human Rights: Patriarchy in Armenia
人権：アルメニアの家父長制
- > Public Sociology: South African Visions
公共の社会学：南アフリカのヴィジョン
- > ISA: Embracing Young Sociologists
ISAに所属する若手社会学者たち
- > Women's Worlds
女性の世界
- > The Brazilian Sociological Society
ブラジル社会学会

NEWSLETTER



VOLUME 2 / ISSUE 1 / SEPTEMBER 2011

GDN

International
Sociological
Association



> Editorial 編集部より

筆 者がすでに記したように、リビアの秩序は崩壊したが、リビアだけではなく、すべての思考が、アラブ諸国全体にわたって、次に起こるのは何かということになっている。動乱というものは世界的な次元を示すものである。そこで本号では、Göran Therbornが世界的な規模での不平等について診断を下し、階級政治の再来を前提にし、Boaventura de Sousa Santosはヨーロッパ、特にイギリスにおける反乱を分析している。他方、Aya Fabrosはマレーシアにおいてアジアからの移民たちが自分たちのコミュニティを作り上げようとしている様子を描いている。Gohar Shahnaz-aryanは南コーカサスの戦乱により引き裂かれた地域における女性の闘いを通して、ソ連崩壊後の再構築へ向けた挑戦を描いている。もしこれらに共通点があるとしたら、それは、奪取であり、「憤る者たち」の集結の呼びかけである。

今回のGlobal Dialog は、Renato Ortizによる英語のヘゲモニーによる影響の検討や、Ari Sitas と Sarah Mosoetsaによる南アフリカの社会科学と人文学のために起草された憲章の議論を通じて、グローバル社会学についての議論が続いている。さらにペルーのNicolás Lynch、ルーマニアのMarian Preda と Liviu Chelceaはそれぞれ、圧政の遺産に立ち向かっている社会学について描いている。

ISAという組織の代表の一人として、Jennifer PlattはISAにおける女性包摂が進捗してきた歴史について回想している。Elisa Reisと Ann Denisは、ブラジル社会学会と「女性の世界(Women's World)」という二つの活発な学術団体について報告している。そして、ISAの素晴らしい先導者の一人であったUlf Himmelstrandへの賛辞も掲載されている。

初め、私たちはこのGlobal Dialogueが単純なニュースレターとなると想像していたが、今やこれは、私たちの専門領域やそれを越えるような切迫した問題に対する社会的視点を提供するものとなった。そして本ニュースレターは、11の言語に翻訳されるようになり、これは本部編集者たちと各翻訳チームの世界的な連帯という目覚ましい業績に負うものである。電子テクノロジーは、昨日まで想像すらできなかったことを今日可能にすることができる。例えば、ISAの役員会との大陸を越えたインタビューも実現可能にする。これについてはぜひ次のISAホームページを確認されたい。(<http://www.isa-sociology.org/journeys-through-sociology/>)

グローバル・ダイアログは、フェイスブックFace-bookやISAのウェブサイト [ISA website](http://isa-website.org)でも閲覧することができます。(芝真里訳)



> In This Issue 目次

編集部より	2
> INEQUALITY AND PROTEST 不平等と抵抗	
The Return of Class 階級の再来	3
The (Non)Citizens of Komtar Komtarの(非)市民たち	6
The Chaos of Order 秩序のカオス	9
> DEBATE ON INTERNATIONAL SOCIOLOGY 国際社会学についての論議	
The Hegemony of the English Language and the Social Sciences 英語のヘゲモニーと社会科学	11
> NATIONAL SOCIOLOGIES 世界の社会学	
Romanian Sociology: Rapidly Making Up for its Rocky Past ルーマニアの社会学:困難な過去から急速な発展へ	12
The Twists and Turns of Peruvian Sociology ペルー社会学の転回と進展	13
> ULF HIMMELSTRAND, 1924-2011 ウルフ・ヒンメルストランド	
Father of Sociology in Nigeria ナイジェリア社会学の父	16
A Personal Tribute from a former ISA President 前ISA会長による個人的な謝辞	17
> SPECIAL COLUMNS コラム	
History Corner: The Uneven Inclusion of Women ヒストリー・コーナー:不均等な女性包括	8
Human Rights: Challenging Patriarchy in the South Caucasus 人権:南コーカサスにおける家父長制への抵抗	18
Public Sociology: Charting the Humanities and Social Sciences 公共社会学:人文社会学の未来図を描く	20
> REPORTS AND CONFERENCES 学会報告	
Early Career Sociologists in the ISA ISAの初期キャリア社会学者たち	21
Women's Worlds 女性の世界	22
Brazilian Sociological Society ブラジル社会学会	23

> Editorial Board

編集長: Michael Burawoy.

編集主任: Lola Busuttil, August Bagà.

本部編集委員: Margaret Abraham, Tina Uys, Raquel Sosa, Jennifer Platt, Robert Van Krieken.

顧問編集委員: Izabela Barlinska, Louis Chauvel, Dilek Cindoglu, Tom Dwyer, Jan Fritz, Sari Hanafi, Jaime Jiménez, Habibul Khondker, Simon Mapadimeng, Ishwar Modi, Nikita Pokrovsky, Emma Porio, Yoshimichi Sato, Vineeta Sinha, Benjamin Tejerina, Chin-Chun Yi, Elena Zdravomyslova.

地域編集委員

アラブ諸国: Sari Hanafi and Mounir Saidani.

ブラジル: Gustavo Taniguti, Juliana Tonche, Pedro Mancini, Fabio Silva Tsunoda, Dmitri Cerboncini Fernandes, Andreza Galli, Renata Barreto Pretulan.

インド: Ishwar Modi, Rajiv Gupta, Rashmi Jain, Uday Singh.

日本: 西原和久(日本語版翻訳監修), 芝真里(日本語版編集事務局幹事), 塩谷芳也, 姫野宏輔, 高見具広, 池田和弘, 岩館豊, 速水奈名子, 福田雄, 三部倫子.

スペイン: Gisela Redondo.

台湾: Jing-Mao Ho.

イラン: Reyhaneh Javadi, Saghar Bozorgi, Shahrad Shahvand, Faezeh Esmaeili, Jalal Karimian, Najmeh Taheri.

ロシア: Elena Zdravomyslova, Elena Nikofova, Asja Voronkova.

メディア・コンサルタント: Annie Lin, José Reguera.

> Global Inequality: The Return of Class

グローバルな不平等—階級の再来

by Göran Therborn (英国ケンブリッジ大学、スウェーデン・リンネ大学、ISA世界社会学学会横浜大会プログラム委員会メンバー)



ヨハネスブルグにて無秩序に広がる貧困
を見つめる前南アフリカ大統領のMbeke

この20年は、世界の貧困国にとっては良い時代であった。1980年代後半から、国際的経済団体が「新興アジア」と呼ぶ、主に中国、インド、ASEAN諸国は、世界全体からみておよそ2倍の速度で成長してきた。2001年以降、前世紀最後の第三世界で悲惨なほど発展が遅れていたサハラ砂漠以南のアフリカ諸国は、現在のはかなりの早さでその世界を拡大し続けており、その拡大には「先進経済」も含まれている。2003年からはラテンアメリカ諸国が、2000年からは中東諸国が、裕福な世界よりも速い成長を成し遂げてきている。共産体制後のヨーロッパ諸国をのぞき、「新興経済発展国」はまた、アグロサクソン系銀行家たちの危機を、裕福な世界よりもうまく切り抜けてきた。

> Nations and Classes 国家と階級

私たちは、地政学的な見地からだけではなく、不平等においても歴史的な転換を経験している。19世紀と20世紀の低開発国の国際的發展からは、とりわけ、人間の間の不平等が、その人の居住場所がどこかであるかによって大きく左右されるようになってきたことがわかる。つまり、その人が住む地域・領土・国家が、先進的なのか、発展途上なのかによって、人の平等が左右されるのである。

2000年までには80%の世帯間収入格差が、居住国によって決定づけられると見積もられてきた(Milanovic 2011: 112)。この現象は、現在変化しつつある。最富裕層と最貧困層の間の格差の広がりには止まってはいないにも関わらず、国家間の不平等は全体的に減少傾向にある。しかし、国内に見られる不平等は、全体からすると規則的ではないが広がりをみせ、「グローバリゼーション」もしくは技術革新による見せかけの普遍的な決定論を完全に否定している。これは階級の再来に等しく、不平等がますますグローバルに決定づけられているといえよう。

階級は常に重要であったが、国家の階級組織と階級闘争という20世紀的な文脈のなかでは、「プロレタリアート国際主義」というネットワークをともなっていたにも関わらず、国家における階級の不平等は、地球規模の国家間にみら

>>

れる格差に隠れて、影が薄くなってしまった。今日、国家はお互いの距離を縮め、階級同士はますます離れてしまっている。

こうした新たな地球規模に流通する階級の側面は、1990年代になってから目立つようになった。当時は、中国の不平等が、資本主義化しつつあった旧ソビエト連邦に生じた不平等よりもさらに膨れあがっていた。また、インドでは(地方における)ゆるやかな平等化の流れが、都市における不平等とともに地方での格差増加へと後退していたときもあった。ラテンアメリカでは、メキシコとアルゼンチンにおいて、ネオリベラリズムによる不平等の衝撃が起こった。

“...nations are growing closer,
and classes are growing apart.”

「今日、国家はお互いの距離を縮め、
階級同士はますます離れてしまっている。」

IMFの研究(2007:37)によれば、正確に反映されていないにしても、1990年代に地球規模で所得占有率を増やしているのは、低所得の国家と同程度に、高所得の国家においても、最も豊かな国民の上位20%のグループであった。残りの五分位階級は劇的にではないが、損をしていることになる。もっとも重要な変化は、所得配分の最上位において起こっている。それは、裕福な上位1%とそれ以下、裕福な上位0.1%もしくは0.01%とそれ以下の間に起こっている。アメリカのノーベル経済学者Joseph Stiglitzは最近(Vanity Fair誌2011年5月号)、裕福な上位1%によって自分の国が掌握されていると指摘している。この1%の人びとが国家財産の40%、国家歳入のほぼ4分の1を専有しており、実質的に米国議会は全てかれらによって構成されているという。前世紀の終わり前後は、裕福な上位1%が合衆国の収入の15%を占めていた。それは、裕福な上位1%が9から11%を占めるインドとは対照的であった(Banerjee and Piketty 2003)。

中国とインド、発展途上のアジア諸国みられる不平等な傾向は、一般に2000年代にも継続し、それはアメリカ合衆国においても同様である(Luo and Zhu 2008; Kochanowicz et al. 2008; Datt and Ravallion 2009)。インドの急激な経済発展は、たとえば、最下層の5分の1の子どもたちにほとんどなんの恩恵ももたらしていない。かれらのうちの3分の2は標準体重に達していない、これは一生健康を害することになり、1995年だけでなく、2009年においてもみられる(UN 2011:14)。かつての第三国において2000年代におこった急激な経済成長は、世界の飢餓に何の影響も及ばなかった。栄養失調状態の人びとの数は、2000年と2007年の間に人類の16%にあたる6億1800万人から6億3700万人に増加した(UN 2011:11)。食料の物価も上がり続けている。

反対に、2011年3月号でForbes誌は、2010年の億万長者が1210人いるという記録と、かれらの総財産が4.5兆米ドルにのぼり、世界で3番目の国家経済を誇るドイツのGDPよりも大きいという記録の二つを、嬉しそうに発表した。(1210人のうち)413人はアメリカ人で、115人が中国人(中国本土)、101人がロシア人である。

しかしながら、技術的にも経済的にも不平等の広がり回避は避けられないわけではない。世界経済的にみても最も不公平な領土として、自らも脆弱な立場にあると認めているラテンアメリカは、不平等が低下している現在地球上で唯一の場である(CEPAL 2010; UNDP 2010)。これは、1970年代と1980年代の独裁軍事政権と、その後の多少とも民主的に選ばれた文民政権のネオリベラリズムへの反感といった主に政治的な結果(Cornia and Marorano 2010)であり、さらにアルゼンチン、ブラジル、ベネズエラなど他国で続く再配分政策も、金の亡者の富豪支配者がいるなかでは、階級がいかに重要かを示している。

国を超えて(収入)階級を比較するもう一つの手段は、人間開発指数を計算することである。この指数は、収入、平均寿命、教育歴を含み、非常に複雑な計算が必要で、かなりの量の誤差がある。それでも、この指数は世界の不平等の注目すべき図式を示している。アメリカの最下層の20%の階級の人間指数は、たとえばボリビア、インドネシア、ニカラグアの最上位20%の階級や、ブラジルとペルーの幸運な上位40%よりも低く、コロンビア、グアテマラ、パラグアイの5分の4とだいたい同じレベルにある(Grimm et al. 2009, Table 1.)。

少なくとも配分が公正にされているかどうかの参考になる階級が、拡大傾向にあることには、国家経済の一極集中以外にも理由がある。レイシズムとセクシズムに実在する不平等は、いまだ至るところで根強いとしても、明らかに減少してきている。近年の重要な事例としては、南アフリカのアパルトヘイトの撤廃がある。民主的な南アフリカはまた、制度化されたレイシズムの後に発生した階級間の不平等を表す最も劇的な例も示している。世界銀行の勇気あるエコノミストBranko Milanovic (2008: Table 3)たちは、地球上の全世帯内の収入格差を表すジニ係数は、1990年代から2000年の間は65から70だと算出している。

しかし、2005年のヨハネスブルクではなんとジニ係数は75であった。これは消費者物価指数を元に出された数字であり、収入を元にはじき出される数値よりも低い数値となっている(UN Habitat 2008: 72)。誤差を許容するならば、アパルトヘイト後のヨハネスブルクの(主に都市の)住民の間に、地球の全人類に見受けられる経済格差と、少なくとも程度の格差が潜んでいるとみるのは、あながち的はずれとはいえないだろう。

> Four Roads of Class Politics 階級をめぐる政治の四つの道程

階級の復活傾向は、少なくとも二つあるが、非常に異なった方向でみられる。一つは中流階級、もう一つは労働者階級においてであり、それぞれにさらに二つの主要な下位形体がある。

一つは、イデオロギー的に突出している中流階級の動向であり、将来的にはグローバルな中流階級が登場し、車、家族向け住宅、無限に増え続ける電化製品と耐久消費財を購入し、海外旅行にいそしみ地球を掌握することになる。グローバル化され加速する大量消費は、環境保護に意識的な人たちには悪夢をもたらす一方で、ビジネスマンや経済誌や経済関連団体をおおいに喜ばせることになるかもしれない。中流階級の大量消費は、ビジネスによる利益の高まりにおいては、金持ちの特権を優遇と同時に、大衆階級になることを望む穏やかな層にも、多大なる利益をも

>>>

たらしめている。こうしたビジネスの夢は実現不可能というわけではないが、それは現状の経済的ディスタンクシオン(差異化)と排除といった社会の爆発的な軌道を、軽く見積もる傾向がある。

二つめの分かれ目は、中流階級と富裕層の間に広がる格差によって、中流階級が消費以前に政治へと駆り立てられている点にある。近年、われわれは欧州人がすくなくとも1848年以降は経験してきていないこと、つまり中流階級が街中に集まり、中流階級革命さえも引き起こすような出来事を目撃してきた。これらの動員された中流階級の多くは、チリのアジェンデ大統領、ベネズエラのチャベス大統領に反対したような人びとや、最近の例では合衆国のティー・パーティーの人びとと同じく、社会的にも経済的にも保守であった。しかしながら、中流階級の抗議といえば、特権的政治と特権「仲間」資本主義に対する敵対であった。いわゆるウクライナのオレンジ革命は、そうした理想に一番近づいたのかもしれない。しかし、2011年の「アラブの春」も、重要でおそらく欠くことのできない中流階級の構成要員を含んでいた。排他的資本主義つまり高収入と上流社会の政治が、すなわち裕福な最上位1%の人びとの、かれらのよる、かれらのための政治経済が、中流階級の怒りを政治の舞台へと引き上げ、予期せぬ結果を招き入れたと思われる。

もう一つの階級の方向性は、労働者階級に焦点化される。歴史上、先駆となった産業資本主義は、法的な権限をもった対抗勢力、すなわち19世紀中頃にマルクスによって予言されていた労働者運動とともに、今や過去のもとなった。とりわけヨーロッパ、北欧諸国ではそうだった。ヨーロッパと北アメリカでは現在、脱産業化が進んでおり、私的な金融資本主義が公的セクターまでにその手を伸ばしており、労働者階級は分断され、打ち負かされ、士気を失っている。

経済の多極化と、国内における格差の急上昇によって、北太平洋諸国の地球規模の階級が(再配分の構造的メカニズムとして)再来した。

産業労働者階級は、世界の工場となりつつある中国にリレーされた。今日の中国の工場労働者たちは、ほとんどが自国における移民である。都市部と農村部の生まれで権利が異なる戸籍制度をあるからであり、これはいまだなくなる気配がない。しかし、中国の産業資本主義の成長は労働者の力を強め、現在それは地方に根づいた抗議と給与の増加を見ても明かである(Cf. Pun Ngai in Global Dialogue 1.5)。中国の政治体制は現在も公式には、ある程度社会主義であると表明している。将来はどうなるかは、皆あれこれ予測するところである。しかし、ヨーロッパから東アジアへと移った工場労働者による分配をめぐる闘争の新たな局面が生じないともいえない。

四つめの階層のシナリオは、アフリカ、アジア、ラテンアメリカから、さらに可能性としてはより影響力は低いだろうが、裕福な世界の中の似たような階層からなる雑多な民衆階層から、基本的な動きを引き出すだろう。

識字率の上昇とコミュニケーションの新たな手段に力を得て、民衆階級の運動は分断という大きなハードルに直面している。つまり、エスニシティ、宗教、とくに正規雇用か非正規雇用、さらにまたたとえば街頭での行商売りや小規模の低賃金労働にみられるような活動の拡散が起こってい

る。しかしながら、組織化、動員と再結集を阻む壁は克服できないものではない。インドは自営の強力な組織を生みだし、タイの民衆階級による赤シャツ党運動は国家の最高位の政治勢力として2011年6月の選挙で返り咲き、民衆階級の連携は中道左派の政府をブラジルや多くのラテンアメリカ諸国に誕生させた。

世界規模の格差へのこれらの四つの階級アプローチには、それぞれ社会学的な妥当性がある。グローバル化した中流階級の大量消費、中流階級の政治的反抗、工場労働者階級の闘争には、階級同士の歩み寄りの可能性もみられ、ヨーロッパから中国と東南アジアへと席卷したのである。4番目の雑多な民衆階級の大規模な流通は、ラテンアメリカと東南アジアの運動にみられたが、アラブ諸国とサハラ以南のアフリカ諸国も含んでいる可能性がある(Cf. Enrique de la Garza and Edward Webster in Global Dialogue 1.5)。将来もっとも実現しそうなシナリオは、これら全ての道に沿った進展である。これらのあいだの重要度の比較は、予測が不可能というわけではなく、その論拠の重要性と意義や価値の評価を下すかが、論争の的となるであろう。しかし、よりはっきりとしているのは、国民国家が未だに手におえない組織として残り、階級闘争が主に国を堺にして継続する間に、グローバルな不平等の新しい転換が生じ、それが人間の生活過程において階級の勃興と国家の衰退を意味するということである。(三部倫子訳) ■

References 参考文献

- Banerjee, A., and Piketty, T. 2003. "Top Indian Incomes, 1956-2000", B R E A D working paper, <http://ipl.econ.duke.edu/bread/papers.htm>
- CEPAL, 2010. La hora de la igualdad. Santiago de Chile, CEPAL.
- Cornia, G.A., and Martorano, B. 2010. Policies for reducing income inequality: Latin America during the last decade. UNICEF Policy and Practice Working Paper. New York: UNICEF.
- Datt, G., and Ravallion, M. 2009. "Has India's Economic Growth Become More Pro-Poor in the Wake of Economic Reforms?", World Bank Policy Research Working Paper 5103, www.worldbank.org/
- Grimm, M. et al. 2009. "Inequality in Human Development. An Empirical Assessment of 32 Countries", Luxembourg Income Study, Working Paper 519, www.lisproject.org/publications/wpapers
- IMF 2007. World Economic Outlook, October 2007. www.imf.org
- Kochanowicz, J., et al. 2008. "Intra-Provincial Inequalities and Economic Growth in China", Faculty of Economic Sciences, University of Warsaw, Working Paper no. 10/2008. www.wne.uw.edu.pl
- Luo Xubei and Zhu Nong 2008. "Rising Income Inequality in China: A Race to the Top", World Bank Policy Research Working Paper 4700. www.worldbank.org/
- Milanovic, B. 2008. "Even Higher Global Inequality Than Previously Thought", International Journal of Health Services: 48:2.
- Milanovic, B. 2011. The Haves and the Have-Nots. New York, Basic Books.
- UN 2011. The Millennium Development Goals Report 2011. www.un.org/
- UNDP 2010. Regional Human Development Report for Latin America and the Caribbean. www.undp.org
- UN Habitat 2008. The State of the World Cities 2008/9. www.unhabitat.org/

> The (Non)Citizens of Komtar:

Transnational Migrants Forging Their Own Communities in Malaysia

Komtar の(非)市民たち —マレーシアにおけるトランスナショナルな移民のコミュニティ構築—

by Aya Fabros (Research Associate with Focus on the Global South, Philippines)

マレーシアのパンナムに、Kompleks Tun Abdul Razak (KOMTAR)というショッピングモールがある。ここは、かつては荒廃していたが、現在は、移民たちが施設を建て直して自分たちの商業施設として使用している。Komtarには多くの外国人が足を運ぶが、ここはいわゆる観光スポットではない。このショッピングモールでは、世界の残酷な一面を垣間見ることができる。Komtarという共有された空間では、シンガポールのラッキープラザや香港のビクトリアパークと

同様に、様々な国の文化が合流しているが、整然と区別されて調和がとれている。このことは、移民労働者たちが折り合いをつけ、しきたりを守って生活していることを意味している。このようなしきたりに従うことは、移民労働者たちが自分の売り場スペースを確保する場合や、国境を越えたりアリティや世界的な不平等の問題に関わる場合に必要とされる。

その評判とは裏腹に、Komtarの内部には暗黙のルールが存在する。移民労働者に対する抑制的なルールは、異

なる移民集団によって分割された様々な区画の配置と重なり合っている。(2) 1階の不便なある場所では、ネパールの食堂が隠れるように営業しており、ネパール人労働者たちの社交の場となっている。彼らはここでカレーやmomos(餃子のような食べ物)を食べ、カトマンズの音楽を聴きながら酒を飲んでいる。(3)本館の上部を見ると、2階はミャンマー人の区画であり、3階はインドネシア人、4階はフィリピン人の区画となっている。

それぞれの移民集団は自分たちの



かつてはペナンの高級ショッピング地区として想定されていたKomtarは、レジャーや娯楽、ショッピングのため地域ハブ施設としてはその輝きを失った後も、依然としてランドマークとなっている。変わることなくペナンの中心街に位置し、そして一番高い建物として、Komtarは今日、グローバル化、そしてゲッター化の舞台となっており、国境を越えて移住してきた人々のために開かれた場所となっている。(写真提供:Aya Fabros)

文化を大幅に保持する一方で、「自分たちとは異なる人びとが同じ場所にいる」という感覚をしっかりと持っている。誰もが知っている暗黙の秩序があり、アジアの様々な品物が混在しつつも体系化されている。そこでは、batik(インドネシアのジャバ島付近で作られる伝統的な文様染)やbagoong(アミの塩辛)、アウン・サン・スー・チーに関する最新のニュースを伝えるミャンマーの出版物を見ることができる。ここはまだ有名な場所ではないが、チャイナタウンやリトルインドアと同様に、一度このあたりを散策してみれば、ローカルな雰囲気とトランスナショナルな雰囲気を併せ持った空間に足を踏み入れることができる。そこでは、国境を越えた相互作用が常に行われている。

マレーシアでは、労働者の4分の1が外国人労働者であると推計されている。彼らは工場やプランテーション、サービス産業において雇用されており、国内労働者として働いている。外国人労働者の数は多く、マレーシア社会も彼らの労働力に頼っているにもかかわらず、彼らは低く評価されており、無視されて不可視の存在となっている。外国人労働者は一時滞在の単なる労働力にすぎないとみなされている。彼らは労働許可証を通して雇用主と仕事に束縛されている。労働許可証には、彼らの勤務先や産業の種類、雇用主の名前が記載されており、雇用主は、労働許可を保証したり、取り消したりすることについて絶対的な裁量を持っているからである。ある労働者は次のように述べる。「あいつらは雇用期間を自由に決めることができる。労働者を雇うのもクビにするのも好きなようにできるんだ。でもオレたちは雇用主を選ぶことはできないし、明らかに搾取されていたとしても仕事をやめることさえできないんだ」。

労働者たちは「働くために」マレーシアに来たとはいえ、同時に一部の労働者は、自分たちの状況を「自由を奪われており」、「まるで古代の奴隷のようだ」と表現している。多くの外国人労働者は、仕事を求めて長い距離を旅したあとに、移動に対する制約や自由に対する束縛と戦わなければならない。彼らは職場や雇用主に管理された生活の場に縛り付けられており、実質的に他の人びとから孤立している。彼らは雇用主に対して極端に従属しなければならない立場に置かれている。雇用主の多くはためらいもなく外国人労働者のパスポートを取り上げ、国外退去になるぞと脅すことによって、彼らを受動的で自分の良いなりになるように

している。脅迫と絶望、孤立の組み合わせによって従順にさせられた結果、職場においても他の場所においても、外国人労働者は虐待と搾取に対して非常に脆弱になってしまった。

Komtarの外部で様々な制約に対する抗議が行われていることを受けて、Komtarの内部でも移民労働者たちが再び市民権を要求し始めている。ここでは、移民労働者は、単なるアイデンティティを剥奪された労働者ではない。彼らは、歯車の一つとして組み立てラインに埋め込まれているわけではないし、売店や家庭で召使いをしているというわけでもない。Komtarにおいて、彼らは、フィリピン人やミャンマー人、あるいはネパール人という自分のアイデンティティを持っており、不本意なラベリングの犠牲者(たとえば、フィリピン人 → 召使い、ミャンマー人 → 不法滞在などと連想される)というわけではない。彼らは自ら選んだ製品を消費する顧客である。あるいは苦労して稼いだお金を母国に送っていたりする。同国人どうしで共感したりサポートを提供しあったりする。また、自分たちの日々の苦労や、継続的な「国の問題」について意見を交換する。他にも、教会の牧師の指名やコミュニティで行う募金、様々な活動の計画、ポスターの掲示やその更新などについて話し合うことができる。このような様々な活動によって、移民たちは地域社会が存在するという感覚を持つことができるようになる。

移民たちは、特定の場所を占有して迷惑をかけたり「危険で不潔」であることを気にとめないが、繰り返される家宅搜索や取り締まり、警察の監視によって、常に自分たちの「立場」を思い出させられる。たとえKomtarのなかであってもこのことは当てはまる。それにもかかわらず、Komtarに出店しているオーナーたちは、この場所で商売することに特別な意味を感じており、その重要性を強調する。もし、ここで商売ができないなら、他に生きていくべき場所がないと考えているからである。

1階のコーヒーショップでは、2人の若い男性が国連難民高等弁務官事務所から新しく発行されたカードを比べながら、アロルスタルに連れて行ってくれる別の仲間を待っている。アロルスタルには、彼らの親戚や友人が拘留されている。2階では、tongitsというゲームをするために、間に合わせのテーブルが用意されている。隣の部屋では、フィリピン人の家政婦がカーペンターズの「トップ・オブ・ザ・ワールド」を大きな

声で歌っている。

Komtarでは、買い物をするつもりがなくても人びとがやってきて、何時間もぶらぶらする。「マレーシアに来たときは、一人ぼっちで誰も友達がいなくて感じるだろうが、Komtarにいれば、少しはそう感じないで済むよ」。フィリピン人の「メイド」はそう話していた。

このように、Komtarは移民たちの集会場として機能している。そこでは、故郷やコミュニティから離れて散り散りになった孤独な労働者が集まって話をするができる。あらゆる移民たちを包含するような集合意識があるわけではない。つまり、明確な共通の目的があるわけではない。しかし、それぞれのコミュニティのなかでは、一定のレベルの連帯が育まれており、市民権を持っていないという彼らの不利な状況を埋め合わせる働きをしている。ここでは、ミャンマーからの移民たちが「自発的な葬儀サービス」と入院サポートを提供する活動を始めた。その活動は、数え切れないほどの資金を集めた後に体系だった組織となり、これらの基礎的なサービスを利用できない労働者のために、葬儀を執り行うようになった。その他のボランティア団体は、困窮している同国人たちにやすらぎと支援を与えると同時に、様々な国の人びとを集めて社会文化的なイベントを行っている。

Komtarは、人びとのダイナミズムと種々の活動によって常にガヤガヤしている。現時点ではまだ、移民労働者が直面する深く埋め込まれた不正義に対して、直接的に挑戦するものではないが、Komtarには人びとの活気があふれている。移民労働者たちは、ほんのわずかな隠れ場所を確保して楽しむ一方で、自分たちの雇用やマレーシアでの滞在を脅かす意図がないことを強調する。彼らは象徴的な提示の仕方、「ここにいることの権利」を主張している。これは、不公平が存在する領域で行われる微妙かつ明瞭な表現である。今のところ、これらの日々の行為は、ありふれた習慣にすぎないけれども、大部分は共通経験によって集積され、多くの人びとによって増幅される。そして、移民労働者たちを孤立させ、彼らの存在を見えなくさせている状況に対抗する力となるだろう。これらのコミュニティが根付くとき、移民たちが作り出す空間がどのように発展し、どのようにしてさらなる連帯がもたらされるかを観察することは、刺激的な体験となるだろう。(塩谷芳也訳) ■

> History Corner: The Uneven Inclusion of Women

ヒストリー・コーナー：不均衡な女性包摂

by Jennifer Platt, University of Sussex,
UK, and ISA Vice-President for Publica-
tions 2010-2014

ジェニファー・プラット
(英国サセックス大学、ISA副会長・出版部門担当)

私たちの最新会員名簿2010年度版の最終ページを見てみると、RC32「社会における女性」部会が最も大きな研究部会となっており、291名の会員を抱えている。これはおそらく、女性運動一般の影響を反映したものであり、また同時にジェンダー問題に対する知的理解が社会学においてなされてきたという、重要な進歩をも反映したものである。私たちは、このことがISAに影響を与えてきたということ、数量的な指標によって辿ることができる。

役員として、女性が初めて選出されたのは1974年である。1978年にその女性が副会長となり、また他2名の女性が役員会に参加した。そして1986年になるまで役員会では(17~18人のうち)女性は3名が占めるにすぎず、同年に5名へと増加した。そのうちの1名がマーガレット・アーチャーであり、彼女は(これまでで唯一の)女性会長となった。1990年代後半までには、21名のうち女性は7名となり、そのうちの1名が副会長となった。2000年代には、22名のうち女性が8-10名を占めるようになり、そのうち2名から4名が副会長となった。明らかに、このことは、数字の上でのジェンダーの平等にむけて徐々に働きかけがなされてきたことを表しており、そして高等教育における女性の占有率が増加したことも影響があったとも言える。

しかし、このパターンはISAに特有のものとして扱うことはできない。このようなパターンは、さまざまな地球規模での社会諸過程が女性を社会学へと向かわせ、その結果ISAのメンバーになったということによる部分が大きいと思われる。1976年の会員名簿によれば、一般会員のたった22パーセントだけが女性であり、役員の18パーセントはまったく彼女たちを代表しているわけではなく、出身国による制約により選出されていたのである。部会レベルの役員において、1970年以前に参加していた数少ない女性たちが全てイギリスもしくは東ヨーロッパ出身であり、このことは当時、社会学が多くの国々で未だ国家制度の下にあったという、各国家の状



女性初のISA会長(任期:1986-1990)とな
ったMargaret Archer

況の多様性を反映している。

しかし、ISA内のさまざまな部門の社会的カテゴリーに関する会員の不均等は、限られているとはいえ一定の影響を持つ。各部会はリサーチ・カウンスルへの代表を一人出すことになっているが、これはもし女性たちが(もしくは他のサブグループが)少数の部会に集中して所属していたら、もっと多くの部会に少数ずつ所属していた場合に比べて、きっとさらに少ない代表者数となるであろう。同じように、数カ国に偏っている女性たちは、各国が代表者を一人出すことに比べて、十分な数の代表者を持っていることにはならないであろう。

RC32のほとんどの会員は女性である。2010年の会員名から私が性別を判別できたもののうち、男性はたった10名であり、女性が数の上で勝っている。このジェンダー・バランスは、他の、特に大きな部会であるRC16社会学理論学部会(257名)とは違っている。このようなさまざまな分野を選択する社会学者の特性の多様性やその特性と主題との関係性は、特にジェンダー以外の研究分野においても、社会学者がこれまでの受け取ってきた知的諸帰結に関するより歴史的な研究に値するであろう。(芝真里訳) ■



炎に包まれたロンドン

> The Chaos of Order 秩序のカオス

by Boaventura de Sousa Santos

ボアベンチュラ・デ・ソウサ・サントス
(ポルトガル・コインブラ大学スクールオブエコノミクス、
米国・ウィスコンシン・マディソン大学ロースクール
ISA世界社会学会議・横浜大会プログラム委員会)

ロンドンおよびその他の英国諸都市における暴動は、その特殊性にもかかわらず、孤立した現象とみるべきはない。それは、私たちの時代を揺るがしている一つの兆しなのである。現代社会では、簡単に引火する可燃物が、家族や地域社会、社会組織、政治家たちにとって自明であるような私たちの集合的な生活の足元を流れているのである。それらが表面に現れてきたとき、ある引き金となるような出来事

によって、想像もできないような広がりをもった社会的な火災が起こるのである。この可燃物は、4つの構成要素から成っている。(1)社会的な不平等および個人主義の是認、(2)個人および集合的生活の重商主義化、(3)寛容と改称された人種主義、(4)市民からの略奪品とそうした略奪行為が喚起する不満とを「合法的に」管理するものへと転化した諸政策が支える形で、特権的なエリート層によって強奪された民主主義。これら構成要素

>>

はそれぞれの内部に矛盾を抱えていて、それらの諸矛盾が交錯するとき、何らかの出来事が大きな爆発を引き起こしうるのである。

> Inequality and individualism 不平等と個人主義

新自由主義のもと、不平等のあからさまな増大は、取り組むべき問題であることをやめて一つの解決策となった。超富裕層が誇示するものは、多く人びとを自らが成功するための努力を十分にしていない負け犬主義であると非難するような社会的モデルの成功の証しとなったのである。これは、個人主義が、逆説的であるが平等なユートピアとして生きられるような、絶対的な価値となることによって可能となった。言い換えれば、各人は社会的な連帯というものを、その執行者であろうと受益者であろうと、なし崩しにしたのである。こうした個人は、自分にとって不都合なときだけ不平等を問題とみなし、こうした不平等が起こったときに、それを不公正とみなすのである。

> Mercantilization of life 生活の重商主義化

消費社会は、人びとの関係を人とモノとの関係に置きかえることを含意している。必要を満たすのではなく、消費対象が別の消費対象を際限なく生み出していき、こうした対象への個人的な投資の増大は、所有されていないときよりも所有しているときに大きくなる。ショッピングモールは、消費の対象のなかで完結するような社会関係のネットワークについてのあやうい幻影を供給する。たえず利潤を追求する資本は、私たちがこれまで共通のもの（水や空気）や私的なもの（プライバシーや政治的信念）としてきたものを、今や取引されるべき商品として市場の法に屈従させる。貨幣は普遍的な媒体であるという信念と、すべての物事はお金を手に入れるためになされるべきという信念との間には、人が思うよりもずっと小さな一歩しかない。力をもった人びとは、この一歩を日々たどりながら何事もなく過ごす。それを見た持たざる人びとは、自分たちにも同じことができるかと考えるが、その結果は刑務所行きなのである。

> Tolerance's Racism 寛容のレイシズム

イングランドでの不満は、その起源から人種的な次元をもっている。2005年の秋にパリとフランス諸都市を揺るがした騒動に人種主義が関係したように、1981年（の暴動）においてもそれは変わらなかった。人種主義と暴動とが一致するわけではない。それは、政治的な植民地主義が終わった後も、長きにわたって私たちの社会に広まり続けてきた植民地的な社会性が強く反映されたのであった。暴動にはさまざまなエスニシティの若者が加わっていたのであり、人種主義は一つの構成要素にすぎない。しかし、それは重要な要素であり、社会的排除に加えて自尊心を腐食させる。いいかえれば、少数者であることが、より少ない所得によってさらに低く貶められる。私たちの都市では、黒人の若者は、彼／かの女が実際に何をしているかに関係なく、日々疑いにさらされ続ける。こうした疑いはすべて、差別と闘う公共政策によって紛らわされている社会のなか存在することによって、多文化主義のどっちあげの外見と寛容の善意とによって、ますます害をもたらすものとなる。人びとが人種主義を見過ぐすとき、人種主義の犠牲者はそれと闘うことによって、彼／彼女たち自身が人種主義者と見なされるのである。

> Hijacking of democracy 民主主義の強奪

イングランドの不満と、格付け機関と金融市場とが押しつけた緊縮政策による市民福祉の破壊との間には、何が共通しているだろうか。いずれも民主主義的な秩序を、不確実な結果のストレス・テストにさらしている。暴動に参加する若者たちは罪を犯したものはあるが、しかし私たちはここで決して、ディビッド・キャメロン首相が「素朴で単純な犯罪性」と呼んだようなものに直面しているのではない。私たちは、ある社会・政治的なモデルに対する暴力的・政治的な弾劾に直面しているのである。このモデルは、銀行を救うための資源は用意するが、若者の名にふさわしい未来を見出せない青年を苦境から抜け出させるための資源は用意しない。そして、若者

は、失業の増大によって見当違いなものとなるかもしれないような、ますます高額となる教育の悪夢におびやかされる。彼／彼女たちは、地域社会から見捨てられた若者たちであり、反社会的な公共政策によって、怒りとアノミーと反乱の訓練キャンプへと送られている。

“...The true disorderly are in power...”

「真の無秩序は権力のなかにある。」

新自由主義的な信条と都市の暴徒との間には、恐るべき対称性がある。社会的無関心、尊大さ、犠牲の不公正なシェアが、カオスと暴力と恐怖の種を蒔き散らしている。いずれ、こうした種を蒔いている人びとは、腹立たしげにこのように言うだろう。私たちが蒔いているものは、私たちの都市を今日徘徊しているようなカオスや暴力や恐怖とは何の関係もないと。真の無秩序は権力のなかにある。すぐさま、それらは権力をもたない者たちによって競合されることとなり、その結果は、秩序を政治的権力の背後へと押しやることとなるのである。（岩館豊訳）■

> The Hegemony of the English Language and the Social Sciences

英語のヘゲモニーと社会科学

by Renato Ortiz

レナート・オルティーズ(ブラジル・カンピーナス大学)

グローバル化時代の公用語は英語である。私が「公的に」そう述べるのは、とくに一つの言語がほかの言語に対して特権的立場にあり、それにもかかわらず、それ以外の言語が私たちの現代的状況を構成しているからである。言語商品のグローバル市場において、英語はグローバル・モダニティの言語となった。それは社会科学にとってどのような意味をもつのであろうか。

私は知的論争がしばしば直面する二つの立場をまず退けることとしたい。一方の見方は、英語の優位性が帝国主義の直接的結果とみなすものである。私は、現代のグローバリゼーションを理解するにあたり、帝国主義という概念が有効であるとは思えない。また他方では、ナショナルなアイデンティティが、ほかのいんちき言語に比して自らの言語に真正性を与えるとする見方がある。ソシュールが述べる通り、記号の恣意性は、特定の領域と歴史の文脈とに結びつけられているのであって、どのような言語もほかの言語に対して優れているわけではなく、ただその真性が異なる様式で把握されているだけである。

近年の論争でみられるありきたりな主張として、英語は科学コミュニティーの「国際共通語(lingua franca)」であるというものがある。しかし「国際共通語」とは何を指すのか。それは、科学者のあいだでのコミュニケーションを最大化するために、複数の可能な意味を排除した一つの言語だといえる。それは、自然科学においては部分的に可能なかもしれない。しかし英語は、社会科学における「国際共通語」としては機能しない。それは国のプライドにかかわる

問題としてではなく、知識が構築されるプロセスにかかわるという理由による。社会学の対象は、言語を通して構成されている。どのような言語を使うかは、付随的なものではなくて、最終的な結果に影響する決定的な次元にある。それゆえ、自然科学の実践と社会科学の実践には違いが認められる。

いくつかの例をあげてみよう。自然科学の教科書は、特定の順序で説明されているばかりでなく、特定の語りの形式をもつ。それは三人称と現在形での記述である。たとえば生物学では、「その放射線は、三つの細い線を描き出す」とか、「突然変異体は、その中枢において……明瞭に自らを示している」というように記述される。動詞は現在形のかたちをとり、また語法に三人称を用いることで、科学者の不在に基礎づけられた客観性が与えられる。社会科学の教科書では、語り手の存在を取り除くことができない。それが、C. ライト・ミルズが社会科学を「知的な手仕事(intellectual craft)」と評した理由である。語り手は「私」あるいは「私たち」というかたちをとり、その記述は三人称に限定されない。「私」または「私たち」のいずれを使おうとも、語りの言説には常に媒介者が介在する。そこにはまた翻訳の問題、それはどの単語を選ぶかという問題にとどまらず、二つの異なる言語間の用語の等価性にかかわる問題がある。翻訳の過程においては、知的伝統の違いもまた考慮にいれなければならない。たとえば「国家問題」(national question)という用語は、ナショナリズムという語に還元することはできない。なぜなら、「国家問題」とは、とくにラテンアメリカで知的論争が生じた特定の政治的文脈を含意するから

である。その文脈は、ナショナル・アイデンティティの問題性、近代の構築のあり方、外国から輸入された諸概念に対する批判、植民地化された国々の劣等コンプレックス、周縁の近代のジレンマを含んでいる。私たちは、書誌学や芸術の伝統——メキシコの壁画家からブラジルのモダニズムにいたるまで——をも引き合いに出して「国家問題」を論じなければならない。「国家問題」とは、それぞれのアイデンティティを探索するラテンアメリカ諸国の歴史に関連する手短な表現なのであり、これをナショナリズムと同列に論じることはできない。

しかしながら、こうした支障があってもなお、社会科学における英語の優位は動かない。そこにはグローバルな規模で英語に有利に働く、一定の学問スタイルの整理統合がある。たとえば、技術面やコスト、市場への供給などの様々な要素にその生産が規定されているデータベースの利用はその一例である。

文献や引用の整理には言語上の登録を要するが、そのデータベースが学問的世界の信頼できる姿をあらわしているかどうかという点、そうした文献や引用は実際は過小であるか隠されているのである。科学情報機構(The Institute for Science Information: ISI)は四つの異なるタイプの目録を発行しているが、それぞれに言語的なねじれがみられる。

1980年から1996年の間では、Social Science Citation Index database にみられる英語による出版物は、全体の85%から96%を占めている。もし文献引用数こそが科学的権威の必要条件だと私たちが考えるならば、それは言語排外主義に基づく(根拠はないが)明確なヒエラルキーを示しているといえる。学術報告書や書籍出版と同じように、データベースの構築にあたり英語が選択されることは、市場の問題でもある。大手企業(Reed Elsevier, Wolters Kluwer)は、文献流通の効率性のために、英語によって世界市場を支配している。このように恣意的な言語的基準が、「学問形成」(あるいは「学問する」)ことのグローバルな正当性の基礎となっている。この恣意性は、(PDF文書、図書目録インデックスなどの)デジタル・テクノロジーの到来と、国際間の翻訳書の不平等な配分によってさらに強化されている。アメリカとイギリスでは、翻訳書が出版物全体の5%を超えることはない。一方、スウェーデンやオランダでは、翻訳書は出版物全体の約

>>

25%を占め、ギリシャにおいては40%にのぼる。すなわち、ひとつの言語がより中心的立場を強めると、その言語に翻訳される文書はより少なくなるということである。結局のところ、その外部に意義は存在しないのである。

もし英語が社会科学において「国際共通語」として機能しないとすると、その優位性の意味は何か。私は、英語はその遍在性によってグローバルな規模での知的討論の場へ「ガイドする」力を獲得すると思っている。この「ガイドする」という意味は、より広範囲な論争可能な問題群から、より意義があり目立つようになった問題を選択するということである。換言する

“...English cannot function as a ‘lingua franca’...”

「...英語が『国際共通語』として機能しない...」

ならば、英語が知的アジェンダを形作る力をもっているということである。だが、他の意味合いもある。

1970年代、ISIの創設者であるユージン・ガーフィールドはフランス科学界の弱みを一つの事実認めた。そ

れはフランス語で書かれることによって、フランス学界の辺境性がきわだつということである。このような主張は、普遍性を英語の特質とみなす一方、辺境性がその他すべての言語を規定するというものである。こうして、グローバルな英語が普遍的な英語となるのである。しかし忘れてはならない点は、コスモポリタニズムがグローバル化過程の特質ではないことである。個別主義がローカルな場で方言としてあらわれる一方、それはまた現代のグローバル化の特徴としてもあらわれている。グローバル・モダニティという状況のもとでは、全世界が辺境化することが、きわめて妥当で当然のこととなるのである。(福田雄訳) ■

> Romanian Sociology: Rapidly Making Up for its Rocky Past

ルーマニア社会学——困難な過去から急速な発展へ——

by Marian Preda and Liviu Chelcea (ルーマニア・ブカレスト大学)

ISA会長Michael Burawoyによる専門社会学、批判社会学、政治社会学、公共社会学という分類を念頭に置くとすれば、ルーマニアの社会学は、政治社会学に強く、その他の3分野は発展途上にあるといえるだろう(弱いともいえる)。ルーマニアの社会学は、19世紀末の戦間期に、ブカレスト社会学派と呼ばれる一学派(エスノグラフィーを中心とする異分野提携の学派であった)によって初めて教鞭がとられた。第二次世界大戦の勃発により、ブカレストで予定されていた世界社会学会議は中止となってしまう、1948年には社会学が禁止され、1966年に再興されたものの、1977年には再び禁止された。1989年以降、いくつかの社会学科が設立され、数千人の学生が学士号、修士号、博士号を社会学で取得するようになった。

この20年間にルーマニア社会学は、3人の労働大臣と1人の首相、2人の国会議長、多くの議員と政治顧問を生み出した。また多くの政治アナリストやジャーナリスト、調査会社、企業取締役などが、ルーマニアにおける社会学者に対する好意的な認知に貢献した。にもかかわらず、ルーマニア社会学を国際的な社会学に再結合させようとする動きは、近年にいたるまであまり重要視されてこなかった。2010年にヨーテボリで開催されたISA世界大会まで、ルーマニア社会学者は国際的なイベントに参加することが稀であった(ヨーテボリ大会には、ルーマニアから30名あまりの参加者がいた)。これは、国際的な印刷物へのルーマニアからの投稿率が、1996年には0.02%だったのが、2008年には0.15%、2010年には0.44%に上昇したという大きな傾向の部分的な現れであるように思われる。データはSCImagoの記事数カウントサービスによる(<http://www.scimagojr.com/country-search.php?area=3300&country=RO&w=>)。

いくつかのトップ社会学雑誌(Current SociologyやSocial Forceなど)に時おり現れるルーマニアの社会学者は別にして、もう一つの潮流は、国際的視野をもつ新たな学術レビュー誌の創刊である。その例のひとつが、環境社会学、南半球の物質文化と消費、社会経済、ライフスタイル、ツーリ

ズムの特集を組んだ近日刊行予定のInternational Review of Social Reserch (www.irsr.eu)である。この雑誌には、Jean-Claude Kaufmann、Michael Redclift、Zygmunt Bauman などの高名な社会思想家や、Richard Handler やDaniel Millerなどの人類学者からの寄稿が集まっている。

2008年には、研究者、大学院生、民間研究組織に属する人びとから構成される社会学者団体であるルーマニア社会学者協会が、新たな専門家の組織として、ルーマニア社会学会(RSS: <http://societateasociologilor.ro/en>)を設立した。現在、会員数は400人を数えている。第1回のRSSの国際会議は、クルージュ・ナポカで「社会の再構築: 新たなリスクと連帯」と題して2010年に開催され、約200件の報告があった(<http://cluj2010.wordpress.com/>)。最も多かった報告は、移民、組織、都市問題、社会問題と政策、社会心理学などに関してだが、非常に興味深い報告は、社会的価値、調査方法論、社会主義後の変容などに関するものであった。

第2回のRSS国際会議は、「グローバリゼーションを超えて?」と題して2012年の6月に開催予定で、2011年9月中旬から報告申し込み受付が始まる。詳細はwebサイトを見てほしい(<http://www.societateasociologilor.ro/en/conferences/conference2012>)。この会議は、ここ30年間で社会学を大きく変えた歴史サイクルの終焉について問題にする予定である。9.11テロや経済危機など、近年の歴史的出来事も考慮しながら、この会議では、ネオリベラリズムとグローバリゼーションのどちらの潮流が消え、どちらが生き残るかの探求を目論んでいる。(姫野宏輔訳) ■

> The Twists and Turns of Peruvian Sociology

ペルー社会学の挑戦: その転回と進展

by Nicolás Lynch, National University of San Marcos, and Former Minister of Education of Peru
ニコラス・リンチ (国立サンマルコス大学・元ペルー教育大臣)

ペルー社会学はようやく科学的学問として、あるいは専門職域として成り立つようになってきた。それでもまだ十分に制度化されたものではなく、社会から十分に認知されているわけでも影響力があるわけでもない。これまでのところ、ペルーにおける社会学の発展は、次の4つの段階を経て進んできた。社会問題への関心、専門職域としての社会学、NGOの社会学への拡散、批判的な理論構築の復活である。それぞれ順を追って、ペルー社会学の挑戦を紹介したい。

> Social Concerns 社会問題への関心

20世紀を迎える頃、ペルーでも社会問題を科学的に省察する機運がうまれていた。ただし、その時点では、国が直面している難局についての大局的な論評の形をとることが多かった。ペルーがとるべき進化の、あるいは発展と改革の方向性を大きな筆で描いてみせたのである。この最初期の思想家たちが、ペルーが抱える難問を問いかけた最初の人々である。支配的な寡頭制を支持する保守的な右翼もいれば、改革派で革新的な左翼もいる。初期の偉大な知識人たちはこの中から出現した。右派には José de la Riva Agüero, Francisco García Calderón, Víctor Andrés Belaúndeなどがいて、左派には Manuel González Prada, Víctor Raúl Haya de la Torre, José Carlos Mariátegui などがいた。

この初期の時代に、具体的に言えば1896年に、サンマルコス大学の文



| José Carlos Mariátegui, 1894–1930.

学部で大学専門課程として社会学のコースが設置された。ただし、国家的な問題の分析にとっては周辺的な役割しか果たせず、もっぱらコントとスベンサーの衣鉢を継いで、社会発展の理論的説明を追究していた。おもしろいことに、その後の成り行きにおいては社会問題の分析が社会学の発展にとって中心的な役割を果たしていくにも拘わらず、この時点においては両者の間にはほとんど接点が見られなかった。

> The Development of Sociology as a Professional Occupation 専門職域としての社会学の発展

ペルーにおいて社会学が専門職域として成立したのはごく最近のこと、サンマルコス大学に社会学部が創設された1961年のことである。少し遅れて1964年には、教皇庁立ペルー・カ

トリック大学にも社会学専攻を含む社会科学部が創設された。どちらの大学も外国からの援助と影響力が大きく、サンマルコス大学はユネスコの、カトリック大学はオランダ政府の助成を受けている。創設期においては、アメリカ由来の構造機能主義が教育、研究の両面において強い影響力をもっていたが、その後、専門的な社会学として離陸するにつれて、「社会問題を解決する」という考え方とともに、社会工学的転回が重要な役割を果たした。

しかし、こうした社会工学的な社会学はすぐにマルクス主義に影響を受けた社会学にとって代われ、学生運動や左翼思想の勢いを受けて、理論的な思考の中心になっていった。この時期は国家主義的で左翼的な政府が出現した時代として特徴づけられるが、軍事的な政変によって、結果的には社会学者のポストが急増した時代でもある。世界の他の地域と同様に、ペルーにとっても転機となったのは1968年であった。この変動によって社会学は革命的な性格をもつことになり、その後の数十年、少なくとも1990年代に新自由主義が回帰するまでその性格が失われることはなかった。マルクス主義の影響によって社会工学的な方向性は脇に追いやられ、社会学は「社会の革命的な転換」とその時期考えられてものに奉仕するものとなった。1970年代に入ると、この新しい方向性と労働市場が改善されたことによって、社会学は社会の中心へと押し上げられていった。この時期にはあちこちの大学で社会学専攻が新しく設置されただけでなく、大学以外のさまざまな政府機関でも多

>>

くの社会学者が雇用され、軍事政府の進める改革を推し進めていった。学術研究の点でも、政治や資本主義的な発展の特質についての分野で重要な発展がみられた。社会学は変革の精神を表現する新しい職域として、専門職の称号を得ることになったのである。

マルクス主義が訴求力をもったのは、グローバルな視野をもっていたからだけではない。ちょうどこの頃、José Carlos Mariáteguiの仕事が再版されており、20世紀初期の社会学の進歩的先駆者たちの仕事に立ち返ったことも理由のひとつであった。Mariáteguiの残したものをめぐって活発な議論が起こり、ペルーの社会学者César Germanáと、職業的な社会学者ではないがアルゼンチンのJosé Aricóによって重要な貢献がなされている。その結果、マルクス主義の影響は限定された範囲にとどめられて、批判的思考の線で進展が見られるようになる。Aníbal Quijanoが編集長を務めるSociedad y Política誌では、1970年代の軍事政権について画期的な分析がなされた。El Zorro de Abajo誌は人類学者のCarlos Iván Degregoriが編集長を務めているが、編集委員会の多くは社会学者である。この雑誌も1980年代に重要な貢献を果たした。編集委員のひとりでもあるSinesio Lópezはアントニオ・グラムシの枠組みを利用して、社会運動の発生と国家の発展を理解する上で興味深い視角を提供しており、特に大きな影響力をもった。Julio Cotlerは寡頭制の正統性欠如と国家建設についての論文で、マルクス主義とウェーバー的思考を接合してみせた。彼の主著であるClases, Estado y Nación en el Perúは1978年に初版が出版されて以来のベストセラーである。

マルクス主義にはもうひとつ別の側面がある。社会学、あるいはペルーの社会科学全体においても言えることだが、マルクス主義の中でもこの時期にもっとも大きな影響力を誇った勢力がマルクス・レーニン主義である。この教条的なマルクス主義は、共産主義運動における毛沢東思想の急速な影響力上昇と軌を一にしており、1970年代から80年代にかけて、特に社会学の講座がある大学において絶大な影響力をもった。教条的なマルクス主義は社会科学のカリキュ



| Aníbal Quijano.

ラムを再構築することを試みて、すべての教授が政治的にもマルクス主義者となり、旧ソ連科学アカデミーの指導書に従い、マルクス、レーニン、毛沢東の著作のみを取り上げることがを要求した。この教条的マルクス主義の知的領域における支配と時を同じくして、ペルーでは政治的暴動の季節を迎える。毛派ゲリラのセンデロ・ルミノソの暴動に端を発するペルー内戦は12年におよび、推定で7万人の死者を出して終わった。

この大転換によってペルーの社会学は死に絶え、専門知としての、あるいは公的制度における影響力は劇的に減退することとなる。公立、私立ともにいくつかの大学では社会学を専攻から排除し、ある程度の質を保ちつつ消えずに残ったのはふたつの古参大学、サンマルコス大学とカトリック大学だけであった。知的領域として崩壊したことによって、職業的社会学者は社会学的な思考のレベルを落とすこ

とになり、また個人としても生き残るのにかつかつの状態になったのは言うまでもない。

> The Deterioration of Sociology in NGOs NGOの社会学への拡散

1980年代から90年代にかけての時期に、専門的な社会学の避難所として重要な場所となったのがNGOである。NGOは文字通り避難所の役割を果たした。というのも、1980年代は内戦の時代であり、そのあとの90年代にはアルベルト・フジモリによる新自由主義的な独裁が続いたからである。社会学が左翼と同一視、あるいはもっとひどいときには革命と同一視されたわけだが、そうした傾向は知的領域としての社会学に悪影響を与えた。かつて社会学の専攻コースを設置していた大学の多くが門戸を閉じたため、社会学者が必要とされる局面、特に公的セクターにおけるそれは急速

>>

に縮小した。他方で、他国の共感者から財政支援をえて、小さな発展プロジェクトをまとめていくNGOが社会学者の手によって設立され、社会的なニーズに直結した仕事を専門的に発展させる上で、多くの社会学者の力量を向上させるきっかけとなった。それでも依然として、社会学は大いなる精神を奪われ、知的発展の可能性を制限されていたことに変わりはない。たとえば、世界銀行のような多国間組織からの資金援助が増えるにつれて、いわゆるワシントン・コンセンサスの影響を受けるようになる。こうした思考様式のヘゲモニーによって批判的に思考された社会的カテゴリーは「サバルタン化」することになる。不平等を貧困のカテゴリーでそっくり取り替える手つきが好例であろう。

1990年代に起きた好ましい出来事として特筆に値するのは、ペルーの社会学者による専門組織としてペルー社会学会(the College of Peruvian Sociologists)が設立されたことである。学会が設立されたことによって社会学と社会学者にとって拠り所ができた。まだまだ発展途上ではあるが、専門的な社会学者が集まり、新しい領域や活動に社会学を適用していく際の信任機関としても機能している。

> Sociology under the Return to Democracy

民主化のもとでの社会学

ペルーが民主化の途をたどり直し始めた2000年には、ラテンアメリカで左翼への転回が起こっており、文化的にも政治的にも大きな反響をもたらした。これによって社会科学、特に社会学が発展する途も開けることになった国が多かったが、左翼への転回による民主化を未だ成し遂げていないペルーでは、その余地はほとんどなかった(少なくとも今年2011年の直近の選挙まではそうであった)。NGOをベースとする1990年代の社会工学的転回と批判的理論構築のあいだにある緊張関係は解決策が見いだされることなく依然として続いていた。専門的な議論の中では、社会工学的転回は社会学を自然科学の延長として擁護するものとみなされたため、批判的な理論構築は社会工学的な転回の影響を大きく受けることなく知的営みの領域に限定されることとなっ

た。もちろん、特に修士、博士の大学院教育の中で新しいアイデアが展開されて、ここ15年の間にかかなり広まってきたのはいるが、1970年代の大学における専門化の初期の広がり方と同じように、講座間の質のばらつきはかなり大きい。そうした中でも、都市社会学や文化社会学、ジェンダー論といった新しい領域での修士論文、博士論文の中には、興味深い研究に基づくものがいくつもある。マルクス・レーニン主義の教条的刻印は葬り去られ、再び浮上しえない地点まできたと考えてよい。

ここでAníbal Quijanoがイマニュエル・ウォーラーステインの影響のもとに進めている新しいパラダイムについて触れておくのがよいだろう。それは「権力の植民地性 (coloniality of power)」と呼ばれる一連の研究であり、José Carlos Mariáteguiの仕事の延長にあたるものと考えられている。Quijanoによれば、ペルーは宗主国群によってラテンアメリカに押しつけられた特異な資本主義の形態の中で恒常的に従属的な地位に押しやられており、国民国家の古い形態をベースにしているがゆえに国家は自らの国民と同一化できず、ヨーロッパ中心で基本的には進化論者のものの見方を維持させられている、とされる。すなわち、この批判が示しているのは、近代化論もマルクス・レーニン主義も、どちらも発展をもたらすことに失敗したという事実である。Quijanoは自らが生きているこの地域がグローバル・サウスとして位置づけられることを認識し、それによって住民のアイデンティティをとらえなおして、政治や経済発展を自らの形態にあうように作り直していくように提案する。グローバル・サウスが自律性を獲得し始めたこの新しい幕開けにおいて、こうした主張は特に重要である。Quijanoのほかにも、多くの人々が自らの領域を再構築し始めている。方法論ではCésar Germanáが、政治と特にシチズンシップではSinesio Lópezが、教育と文化ではGonzalo PortocarreroとPedro Pablo Ccopaが、ラテンアメリカの左翼への転回についてはAlberto Adrianzenが注目に値する。

> Conclusion 結論

ペルーの社会学は科学としても、また専門職域としてもまだまだ発展途上にある。社会学的な思考の多くは未だ萌芽期にあり、個人個人の知性の中に留まり続けていると言わざるをえない。制度的な発展も大学教育の範囲にとどまり、その多くは導入レベルにすぎない。領域に特化した研究センターもなく、異なる領域の研究者が集結するようなプロジェクトもない。それでも、ペルー社会学は教条主義的なマルクス・レーニン主義や新自由主義の手によって1980年代から90年代にもたらされた破壊の脅威をなんとか乗り越えてきた。これらの脅威を生き延びてきたことによって、専門的な研究領域をもう一度発展させることも、新しい専門知を開拓していくこともできるようになった。しかし、もっとも大事なことは、それらは未だ理論的な知識の形態をとっているということだ。新しく拓かれた途をうまく利用することができれば、ペルー社会学は地域の自律性や、ラテン・アメリカ全体の新しい形態の発展に途を拓くことができるだろう。文化や政治の分野で進歩的な発展がなされているように。ここにこそ、ペルー社会学がその発展を切り開いていく新しい地平があるのだ。(池田和弘訳) ■

> Ulf Himmelstrand, 1924-2011 – Father of Sociology in Nigeria

ウルフ・ヒンメルストランド(1924-2011)——ナイジェリア社会学の父

by Ayodele Samuel Jegede

アヨデレ・サムエル・ジェゲデ (ナイジェリア・イバダン大学社会学部教授、社会学部長、ISA会員)



ウルフ・ヒンメルストランドを偲んで(写真提供: Ayodele Samuel Jegede)

ナイジェリアにおける社会学の父、ウルフ・ヒンメルストランド(1924生まれ)が2011年6月8日、故郷であるスウェーデン・ウプサラにて亡くなった。享年87歳だった。ヒンメルストランドは、父親がスウェーデン教会の宣教師をしていたインドで生まれた。学校教育はスウェーデンで受けたが、幼少期の多くはインドで過ごした。このことは、彼をいずれの国においても否応なくマージナルな位置へと置くこととなった。その後、研究上の選択がもたらした機会のため、彼はさまざまな外国の環境に身を置くこととなるが、そこでは、大きな社会的動乱が眼前で進行していた。ナイジェリアではビアフラ戦争のさなかであり、カリフォルニアでは1960年代の学生革命が頂点に達していた。こうした経験が間違いなく、彼の社会学に影響を及ぼした。

1960年、新進の研究者としてヒンメルストランドは、『社会的圧力、態度、民主的過程』と題する博士論文を完成させた。この仕事を終えるまでは、彼はウプサラ大学で講師をつとめ、1960年から64年まで助教授をつとめた後、ナイジェリアのイバダン大学教授および初代学部長に指名された。

1960年のナイジェリア独立以前と独立後の数年にわたり、ナイジェリアにおいて専門的な社会学者は微々たる存在だった。イバダン大学やナイジェリア大学ンスカ校では、社会学は植民地主義的な社会人類学のなかの一科目にすぎなかった。イバダン大学初代副学長の大御所ケネス・ダイクは、イバダン大学を世界クラス基準へと押し上げるという大胆な戦略をもって

たが、その構想の一つが、社会人類学を脱植民地主義化し、標準的な社会学を導入することだった。ロックフェラー財団からのチームとの共同作業を経てケネス・ダイクは、ウルフ・ヒンメルストランドという名の、40歳のスウェーデン人社会学者を、イバダン大学で新たに独立した社会学部の初代学部長に抜擢した。

1964年8月ナイジェリアにやってくる前に、ヒンメルストランドはスリランカとスウェーデンでの調査によって自らの居場所を切り開いていた。イバダンに到着後、彼は二人の優れた研究者フランシス・オル・オケヂジとアルベルト・イモヒオセンに出会う。そこにイギリス人の社会人類学者ルース・ミュレイと米国人の社会心理学者ポール・ハレとが加わった。社会学部が経済学部から派生する1960年までその下位部門の長を務めていたピーター・ロイドの後を、ヒンメルストランドは引き継いだ。彼は、優秀な学生が社会学の奨学金を得られるための基盤を築いた。ピーター・エケとステファン・イモアゲネ(ともに現在は高名な教授)は、ヒンメルストランドが教えた最初の大学院生である。

ウルフ・ヒンメルストランドはより多くの学生たちを、社会学を学ぶことへと魅了した。彼は、カリキュラムを脱植民地主義化し、ナイジェリアの文化をより尊重する主流の社会学へと導いた。イバダン大学での最初の年、ウルフ・ヒンメルストランドは、執行部を大いに興奮させるものをこの大学へもたらした。国際的な研究プログラムとそれに見合う潤沢な資金である。1965

年の「夏」(長期休暇)、社会学部は政治文化研究についての国際的なワークショップを主催し、米国やラテンアメリカ、ヨーロッパ、アジアから著名な社会学者を招いた。そこには、シドニー・バーバ(スタンフォード大学)やロバート・ソマーズ(カリフォルニア大学)といった研究プログラムのリーダーも含まれていた。ナイジェリアの研究部門はヒンメルストランドが率いたが、これがナイジェリアで初めて行われた全国規模の社会科学的な調査研究だった。この調査は1965年から67年にかけて行われ、ナイジェリアのすべての地域をカバーした。幸いなことに、こうした広範囲にわたる社会調査の伝統は、いままイバダン大学社会学部に存続している。

彼は、のちに世界中で名声を得ていくこととなる幾人もの若い研究者を指導することができた。ピーター・エケ、ステファン・イモアゲネ、エクンダヨ・アケレドルーアレ、サムソン・オケ、シミ・アホンジャ、アデスワ・エモボン、マーティン・イグボズリケ、そしてライ・エリノシヨの各教授は、この博識なスウェーデン人から指導を受けた人びとである。アビゲン・アブバジェとエグホサ・オシャガエの両教授は、のちに彼とともに著作『発展についてのアフリカの視点』の執筆に関わった。

彼は、卓越した社会学者として選んだフィールドにおいて、大きなインパクトをもたらした。彼は国際社会学会の会長を1978年から82年にかけて務め、1978年には世界社会学会議を彼の故郷であるウプサラで開催した。

亡くなるまで、彼はアフリカニストであり、理論家であるとともに実証家であり、ある程度社会心理学を注視したマルクス主義者であった。ヒンメルストランドは熟達した研究者だった。多くの人びとの生に触れ、世界中に影響を及ぼし、1989年にはウプサラ大学の社会学の名誉教授となった。ヒンメルストランドは、7月12日に彼の故郷に埋葬された。その魂が、完全なる安寧のうちにあることを心から祈りたい。(岩館豊訳) ■

> A Personal Tribute to Ulf Himmelstrand

ウルフ・ヒンメルストランドへの個人的な謝辞

by Margaret Archer マーガレット・アーチャー
(英国・ウォーリック大学、ISA元会長(在任:1986-1990))

2011年6月8日のウルフ・ヒンメルストランドの死は、世界の社会学に、最も寛大で、献身的な友人の一人の喪失をもたらした。彼にとって「グローバル化」は単なる概念でも原因でもなく、それは彼の生きた世界に通じるものだった。決して他の人に彼の伝記を押し付けるわけではないが、彼の献身的なサポートの証は、それを直接、経験した人々の語りによってつないでいく必要がある。

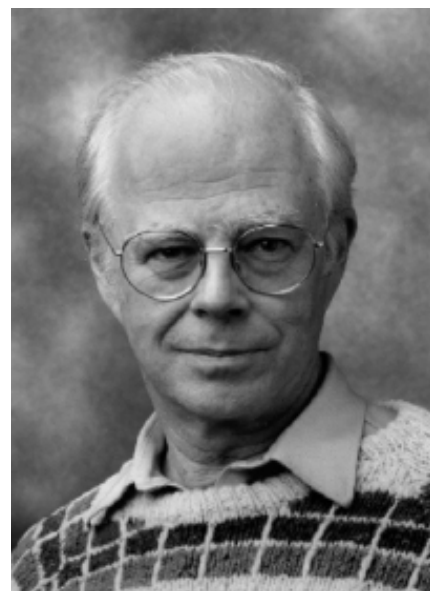
これは、特に彼が1960年代半ば、イバダン大学における社会学部の学部長として在籍していたころの事例である。アフリカとナイジェリアにたいする彼の特別な愛は、非常にはっきりとしていたが、彼がナイジェリアのために行ったことは、彼自身が「人類学と社会学の脱-植民地化」という壮大な用語によって特徴づけていたものとは、何かしら異なるものであった。しかしながら彼の思想は、部分的に彼の指導と研究、そしてイバダンにおけるカリキュラムの改訂によって、また同様に、自分たちのキャリアを通じて将来性をもつ若手ナイジェリア研究者の世代を育成することへの彼の力強いコミットメントによって達成された。ピーター・エケは、彼が書いた死亡記事(『ガーディアン』2011年6月26日)において、こうしたヒンメルストランドのサポートについて永久的忠誠を示す彼自身の謝辞を記しているが、それは多くの経験を反映しているに違いない。

一人のアフリカニストのアフリカのための愛は、回復力の強いものであった。およそ四半世紀の後、彼が強盗に襲われ、頻繁に訪れる訪問者の一人が怪我をさせられたときも、彼のその後のメッセージは、自己憐憫や非難のことばは含まれておらず、どのように彼がキーボード演奏の再学習と彼自身の仕事を続けているのかについて、その実践的な詳細を素朴に静かに語るものであった。

さらに、かつてローランド・ロバートソンは、「グローカリゼーション」という用語を考案したが、ウルフにとってこの用語は、彼自身の小さなウブサラの町と、頻繁に定期的に訪問していたナイジェリアの友人からなるグローバル・ネットワークとしての継続的な活動の中に生きていた。こうしたことに対応して、彼はISA副会長(1974年~1978年)として、1978年にウブサラで、つまりウブサラを中心とする会場で世界社会学会議を開催することを熱望したのだった! 彼はこれが忘れられないイベントになることを望み、スウェーデンと北欧諸国

一般のための国際社会学の好見本にしようとした。彼はまた、情熱的な理論家で、その時代の機能主義とマルクス主義の両者に批判的であったので、世界会議のハイライトでは、パーソンズとブーランザスの間でディベートを行う予定だった。これは、プログラムの他の部分との重複を避けるために夕方に予定され、規模は大きいが中心からずっと離れた大聖堂で行われる予定だった。きわめて残念なことだが、私たちは何百人もが、このイベントのために雨の中を歩いたが、イベントの司会者はこれらの巨人が出席できない旨が説明された二通の電報を読むことで、謝罪を表明していた。多くの傘が再び広げられ、私たちは豪雨の中を帰り始めた。前を歩く大勢の人とともにずぶぬれになりながら私は、私の後ろからゆっくりと人を探しながら走る車にイライラしていた。結局、その車が追いついたかと思うと、ウルフは私を大勢の中から救出し、そして他のずぶぬれの羊たち[彼の友人たち]の健康をチェックするためにゆっくりと運転し続けたのだ。

ウルフがISA会長の頃(1978年~1982年)、私は出版物の仕事の関係で、彼に近いところで仕事を続けていた。執行委員会の会合は眠気を抑えるために、短い時間でかつ熱いディベートをもとに行うことができた。私が一緒に仕事をした会長のうちでは2人だけが、彼らの穏やかな合理性によって暴発の可能性を拡散することができた。それは、トム・ボットモアとウルフ・ヒンメルストランドの2人である。ウルフは、彼をアシストする特別な装置をいくつか持っていた。多量の喫煙は不可能な日々ではあったが、ウルフはパイプ喫煙者にとっての必需品、すなわち私が全く理解していなかった異なる利点をもつ8つのパイプのためのラック——突き刺す道具、カスを取り除く道具、洗浄するのに必要な道具(これも私には理解不可能なのだが)、そしてさまざまな煙草の缶が置かれている——を注意深く整えて、それらの後方に座った。これらは、会議室を汚染しないようにする儀式のための舞台用小道具だった。合理的な俳優ならば、どうしてそれほどまでの装置が、ささやかな心の満足のために必要だったのかと疑問に思うかもしれない。しかし、それはポイントではなかった。重要な点は、気持ちを鎮めながら、ウルフはパイプクリーナーで彼の吸った煙草のカスを固めるようにして、最終的に穏やかに合意の定式を生み出すまでに至る点である。当時、私は彼が声を荒げるのを(その必要があった場合でも)聞いたことがなかったし、さらに彼の解決策は単純に平和的なものではな



Ulf Himmelstrand, 1924-2011.

く、私たちを前方へともたすものであったのである。

ウルフにとって、同僚との関係もまた友情の一環だった。フォーマルな会合と同様に、彼は同僚の自宅も訪問した。かつて彼はイギリスで講義をしていたのであるが、当時、彼は基本的に自転車通勤をしていた。彼はオックスフォード郊外にある私たちの家に挨拶に行きたいと申し出た。彼は本当に、約60マイル離れたオープンユニバーシティから、実にスウェーデンのエチケットに忠実に、自転車までやってきて私にプレゼントを届けてくれた。このプレゼントは、ノースオックスフォードシャーの行商人の英語で書かれた、生垣を賞賛した田園詩だった。サイクリストがドアに近づくと、その後長い間、私の二人の若い息子は興奮して、“Oolf”、“Oolf’s Back!”と叫びながら書斎に駆け込んできた。

友人として、ウルフをいつも近くに感じていた。彼は、マドリッドにおいて私が会長講演(1990年)を行い壇上から降りた際に最初に挨拶してくれた人だったが、その際はいつものように華麗な賛辞を述べるのではなく、温かく強く抱き締めてくれた。その後、私は——彼は決して公言も言及もしなかったが——彼が私の著書のために書いてくれた寛大な書評に出くわすことになるのだが、他の人とは違って彼は明らかに、最初から最後まで私の各著作を読んでくれていたということを痛感したのである。今、彼は私たちのもとを去った。彼は私に、とても悲しく悔しい感情を残していた。決して彼に告げたことはないが、なんと貴重な友情だったのだろうか。この小さな賛辞が、社会学へのウルフの貢献に関わる記述よりも、彼の個人的資質により集中しているとすれば、それは、社会学への貢献と同様に、十分にそして持続的に、最も寛大な人物として普遍的に認識されるべき、より偉大なひとつの業績のように私には思えるためである。(速水奈名子訳) ■

> Challenging Patriarchy in the South Caucasus

南コーカサスにおける家父長制への挑戦

by Gohar Shahnazaryan (アルメニア・エレバン州立大学)



国際デーに女性への暴力の撤廃を訴える、エレバンの運動家たち(写真提供: Gohar Shahnazaryan)

1991年のソビエトの崩壊は、アルメニアと南コーカサス地域全体における女性運動を挑戦的な新しい段階へと導いた。国際機関からの協力や資金援助を得て、女性の非政府組織(NGO)が設立された。2003年に私たちは、アルメニア人とディアスポラたちから若い女性のグループを結成し、若い女性がアルメニア、グルジア、アゼルバイジャンにおいて直面している問題について議論を開始した。私たちはオフィス空間として使用するための空間を持たなかったのも、Artbridgeというエレバン、アルメニアの首都の中心エレバンに

位置するカフェ書店で集まったものだった。一年後に私たちは、自分たち自身のため、そして他の公然と疎外され周辺化され過小評価され、さらに人びとから何にも意見を聞いてもらえない若い女性のためのエンパワーメントのスペースを設置することにした。その空間は、ソビエト崩壊後のアルメニアの若い女性のために作り出された最初の情報供給センターとなった。それ以前には、私たちはエレバン州立大学のキャンパス内に陣取り、また若い女子学生たちのためのドロップイン・センターとしての役割を果たしていた。

だがすぐに、大学の官僚的な秩序が私たちの活動にたいして克服できない障害物をもたらした。大学は午後6時には建物を退出するように要請し、性、性の健康、および大学におけるセクシュアルハラスメントの問題など、特定のトピックを論議することを禁じた。そのため私たちは、大学から移動し、独立した非政府組織として登録することを余儀なくされた。それを私たちは女性資料センター (www.womenofarmenia.org)と呼んでいた。2006年以来、私たちはダウンタウンのエレバンに移転し、あらゆる年齢、教育、

>>

性的指向、そして社会的背景の女性をオープンに受け入れている。多くの人々は、私たちのことを、女性の権利に関する毎月の研修を通して知ようになる。その研修において、私たちが議論したのは、アルメニアと同じように他国の一部においても女性に対する差別があること、またアルメニアにおける女性運動の歴史、家父長制との関係、女性にたいする権力と暴力、そしてジェンダー構造の社会的、文化的バイアスについてであった。学術的なワークショップや講義や出版物から離れて、私たちはまた別の権利擁護のイベント、つまりデモ行進、合同展覧会、フェスティバルなどを組織することで、ソビエト崩壊後の若者の無関心を鼓舞しようとした。私たちはまた、アルメニアと南コーカサス（グルジア・アゼルバイジャンと三つの紛争地帯——ナゴルノ・カラバフKharabakh、南オセチアとアブハジア——を含む）の全領域における数多くのジェンダー問題に関わる人びとを動員した。一般的に、私たちのイベントは、物議をかもしたタブーに関わる問題を対象にして組織化された。例えば、女性のセクシュアリティ、処女性、および女性に対する性的暴力などである。例えば、2008年に私たちは、「赤いリングを埋葬する」という芸術的なイベントを組織した。「赤いリング」の儀礼は、女性の身体と性を統制する家父長制に基づく儀式のことである。この儀礼は、今なお若い花嫁の純潔のシンボルとしてアルメニアにおける小さな町や村では非常に一般的である。この儀礼によれば、花嫁の家族と義理の家族が結婚の二日目に新しい家族を訪問し、花嫁の処女を確認するというものである。花嫁の純潔を象徴するために、彼らは赤いリングのバスケットを持って行くのである。

私たちはまた、平和構築プロセスにおける女性の役割に関する事業にも取り組んでいる。これは1990年以来、地域で三度の残忍な戦争があったことを考えると、特に重要である。実際、今日でさえも私たちは「戦争でもなく、平和でもない」状況にさらされている。その結果、私たちは、独身女性やシングルマザーだけでなく、何千人もの難民——全員、うつ病や心

的外傷後ストレス症候群に罹っている——の問題に直面している。したがって、私たちは女性に心理的なサポートだけでなく、医学的なアドバイスを与えるためにナゴルノ・カラバフでセンターの支所を開設した。私たちは、彼女らがホームメイドの製品を販売できるように、ビジネス・コネクションを開発しようとしている。戦後のかけ橋を構築する試みのなか、私達は、アルメニア人とアゼルバイジャン人が会うことのできるイスタンブールやグルジアのような中立の場において合同会議を開いた。

グルジアとアゼルバイジャンからの私たちの同僚と共に、本年度は、有名なヴァギナ・モノローグの朗読をアルメニア、アゼルバイジャンとグルジアにおいて、私たちが尊敬する言語であるいくつかの方言を用いて行った。イベントは、2011年2月、トビリシ、グルジアの首都で行われた。私たちはこのイニシアティブが非難されることを非常に恐れていたが、とても驚いたことに、それは身体と性について、また暴力や差別についての女性の話を聞くために集まった男性と女性の両方に、深く受け入れられた。参加者の一人として報告すると、「異なった音の言語を端々に聞くこと、性、身体、レイプ、発見などについて異なった女性の声を聴くことが信じられないほど素晴らしかった」といえる。それは三国間の境界を溶解する語りの行為であるかのようだった。私たちが非常に誇り高く思っている最新の成果のひとつは、アルメニア刑法におけるは性的暴力に関する法律の変更および修正を起草したことである。その草案は現在、議会で審議中であり、私たちは、それが秋の公聴会で受け入れられることを望んでいる。現行の法律は非常に弱い。それによると、性的暴行は、他の重大な犯罪と同じようには分類も処罰もされていない。

確かに、私たちはまた多くの障害を経験している、その理由の大部分は、私たちがフェミニストとして位置づけられることである。その捉え方は、私たちを「急進的」で「伝統的な家父長制家族に挑戦している女性たち」へと常に自動的に仕立て上げる。

通常、人びとが聞いて非常に驚くことは、アルメニアの女性運動はアメリカやヨーロッパから「輸入」されたものではなく、その反対に6世紀から7世紀さかのぼる、男性と女性が法の下で平等であった時のアルメニアの歴史に深いルーツをもつという点である。一般の公的な対立から離れても、私たちはまた女性運動そのものの中で緊張に直面している。残念ながら、ほとんどどこでも、ソビエト崩壊後の世界では、かつて共産党の活動家であった女性や、現在は非政府組織で活動している女性による女性運動の「独占」がある。その結果、南コーカサスの国々を含むポスト・ソビエト諸国の大部分において、現代の女性運動はあまりにも頻繁に家父長制ソビエト系の要素とリーダーシップの権威スタイルを再生産しすぎている。それは、革新的なアイデアやコンセプトに強く対抗する場合がある。「市民団体」「草の根の組織」そして「社会活動家」といった概念を考える上でもまた、大きな溝がある。かつての共産党の活動家で、現在はNGOを立ち上げている高齢者の女性と、もっと若い女性で、平等主義を重んじ、民主主義の中で階層を気にせず、活動と社会変革を理想とする女性との関係を考えればわかる。したがって、私たちのNGOとしての主要な目標は、女性の権利とジェンダーの平等のためにロビー活動とアドボカシーキャンペーンの啓発に参加できるように若い女性の立場と自信を強化し続けること、である。

したがって、ここには南コーカサス地域における新しい女性運動の種がある。それは、一方で民主主義の価値と原則を促進させること、他方でジェンダーと女性のための権利のエスニク・文化的な特性の認識を促進させること、こうした点に基づく運動である。（速水奈名子訳）■

> Charting the Future of the Humanities and Social Sciences: A Bold Vision from South Africa

人文社会科学の未来図を描く——南アフリカ発の雄大なビジョン——

by Ari Sitas(ケープタウン大学、前ISA副会長(2002-2006))
and Sarah Mosoetsa(南アフリカ・ワイトワートスラント大学)

南アフリカ高等教育訓練大臣Blade Nzimandeは、人文社会科学の将来計画を立案し、それを提案するよう、社会学者Ari SitasとSarah Mosoetsに依頼した。そこで今回のGlobal Dialogueでは、その雄大なビジョンについて、二人に要約をお願いしました。レポートの全文とコメントは、次のwebサイトで閲覧できます(www.charterforhumanities.co.za)。

いま人文社会科学(Humanities and Social Sciences: HSS)は世界中で、高等教育の場において、様々なフィールドの研究を活性化しなければいけないという要請に迫られており、南アフリカでは、人文社会学のための新たな計画が作成されている。タスクチームとレファレンスグループが、高等教育訓練大臣の指示で結成された。計画の草稿を作成するにあたっては、既存の問題の大洪水の中で溺れてしまうことを避けたいと思った。過去の南アフリカのアパルトヘイトによる遺産を拭き去るために必要な救済措置をとることにとどまるのではなく、未来にふさわしいビジョンと成果を提供することを望んでいる。

ポスト・アパルトヘイトの第一歩が、南アフリカの第三次教育システムによって要請された教育学と調査研究の組織を作ることによって始まった時、そこには緊急に応えるべき重大な要求があった。それは、Manuel Castellが『情報化時代』(1998)の第3巻冒頭に記していた点、すなわち「動的でグローバルな経済がこの惑星において構成されているが、それは、世界中の価値ある人々と活動とを結び付け、富と権力のネットワークのスイッチを切り替える間に、支配的な利益の観点とは無関係なものとして複製された人々と領域とを結び付けることだ」という文章である。

Castellは、「第四世界」に留まることを余儀なくされて新たな排除を受ける人々、つまりデジタル・デバイドの影響下におかれている人々の痛ましい語りを編集している。しかし南アフリカのリーダーは、「情報の資本主義のブラックホール」に陥ることは考えられないこと——是が非でもこの運命を回避する必要があるなどとい

たことは、交渉する余地もないことだと考えていた。黒人の悲観主義から離れて活動することを望んだ多数にとっては、自分自身を自分で救うことが義務となった。その結果は、科学技術を優先し、経済発展を強化する方向へと、学界の舵を切ることを試みた政策上の枠組みであった。人文社会科学の重要性は軽視され、奨学金は消滅し、その貢献も社会から疎外されてきた。これは、現在の政府の基金のありかたの偏見を反映したものであり、また、John HigginsがSTEMモデル(科学S、技術T、エンジニアリングE、マネジメントM)と名付けた、生産性に依拠して研究に補助金を与える——人文社会学への奨学金に無配慮なモデルを反映したものだ。全世界の教育システムにおいて高等教育が「企業化」していることが示すものへの批判が高まっていることとちょうど同じように、このように単一の学問分野だけを強調することが示すものに対する力強い批判も存在する。あらゆる高等教育機関の1000人を超える仲間たちや、政府利益団体・市民団体との出会いを経て、私たちは人文社会科学(HSS)への奨学金制度が、遺産・歴史・記憶のリポジトリになり、また南アフリカの平和・繁栄・安全保障・社会経済的な発展を求める戦いの手段になりうると確信している。

熟慮と分析を経て、私たちは非常に健全な原則であると思われるものにもとづいた、一連の宣言文を完成させた。私たちは、2つのフェーズ(第1フェーズ:2012年~2015年、第2フェーズ:2015年~2018年)において行われるべき6つの重要な政策を提案した。

私たちは、タスクチームの提言が実行されるならば、2030年までに人文社会科学は、アフリカにおける奨学金、教育学、コミュニティー実践、社会

- アカデミー/研究所/実体のある人文社会科学を構成すること——研究フィールドを活性化する目的に特化した機関として、第1フェーズには5つのバーチャル小学校を、第2フェーズには4つのそのような学校を、計画的に各州に配置すること。
- ソクラテス計画やエラスムス計画など欧州連合が実施したプログラムのような、大陸全体におよぶアフリカのルネッサンス・プログラムを生み出すこと。
- 公正さと雇用機会へのアクセスを生み出し保存するための、生涯教育と教育機会のナショナルセンターを創立すること。
- 人文社会科学のフィールドを活気づけるような、6つの促進措置のプロジェクトを第1フェーズ中に統合すること。
- 研究のフィールド/作法を統合するために必要な、新しいフレームワークと新しい形式を創造すること。
- 現状の見通しでは危機が感じられる人文社会科学奨学金について、14の是正措置を執行。

的責任の中核を占めるようになるだろうという未来を描くことができると主張している。さらに私たちは、私たちの機関と私たちの学界が、世界の知識生産とその普及において、南北世界の優越性の中心と肩を並べるパートナーになることができるの構想をもっている。私たちは、すべての社会の社会的進歩と経済進歩に対して第三の教育と研究が中心となることを認識することで、私たちは、私たちのシステムが変化のための重大な共同執行者でありうる道を推奨している。そして何よりも、大陸上のダイナミックな中核となり、グローバルなイニシアチブのパートナーとなり、進歩と変化についてのアイデアのための重要なエネルギー・センターとなること、私たちのビジョンの中心を成しているのである。CODESRIA(アフリカ社会科学研究発展会議)が、人文社会科学のために、この南アフリカのプロセスがアフリカ全体の憲章へと発展することを期待しているという事実は、私たちをととても勇気づけている。(姫野宏輔訳) ■

> Early Career Sociologists in the ISA¹

ISAにおける初期キャリア社会学者

by Emma Porio エマ・ポリオ(フィリピン・アテネオ・ドゥ・マニラ大学、2006–2014年ISA理事)

ヨ ーテボリで行われた第17回世界社会学会議の直後、新たに選出されたマイケル・ブラウォイは、ISAにおける初期キャリアの社会学者の状況をよりよく知るための分科会を設置した。以下は、ISAの学生会員調査の結果およびメキシコシティで行われた理事会(2011年3月23～25日)で示された分科会の報告の要約である。

分科会の報告は次のデータに基づいている。1)ISA事務局によって行われたISA学生会員の電子調査(回収率は約30%)、2)2000～2009年のPhDラボ入賞者と彼らのその後の地位、3)PhDラボメンバー、若手社会学者ネットワーク(JSN)の会員、非会員の証言、4)インターネット上のJSNグループ、5)PhDラボ主催者、6)JSNのトップと当時のISA会長ミシェル・ヴィヴィオルカ、現会長マイケル・ブラヴォイとの対話。なお、電子調査は基本的な社会人口学的属性(年齢、性別、博士課程修了年、電子メールアドレスや郵送先、大学院での研究生活を送った国、学卒年、就業形態)を網羅している。

ISAにおける初期キャリアの社会学者とはどういう人たちなのか。5053人のISA会員のうち、830人、16%が初期キャリアの社会学者にあたる。彼らは学生会費を払っているISA会員であり、多くは修士課程、博士課程在籍、もしくは最近学業を修めた人たちである。彼らは直近の学位を取得してから最大4年間は学生のカテゴリーに分類される。出身国の経済水準での分類の点からみると、その分布は、ISAの一般会員の分布と同様で、A地域から507人、B地域から245人、C地域から78人である。

調査に回答した253人のうち、138人(56%)が女性で、115人(45%)が男性である。また、大半(80%)が博士課程の学生であるが、残りは最近の博

士課程を修了した者(14%)、修士課程を修了した者(4%)である。また、1人のみ社会学の学部生と回答している。大半の大学院生は母国で学位取得を目指している。博士課程学生の多く(54%)、博士号取得者の多く(78%)は安定した職業的地位を持っており、修士号のみの取得者が半数ほどしかそうでないのと対照的である。

どのようなルートでISAの会員になるのかについては、ISAのPhDラボに以前参加したことがある人(130人)、若手社会学者の国際コンペの入賞者、ファイナリスト(約45人)などである。しかし、PhDラボの130人の参加者(2000～2009年)のうち、約半数(64人)しかこれまでISAの会員になっておらず、2010年11月時点では34人しか会員でありつづけていない。

第16回世界社会学会議(ダーバン、2006年)のとき、ISA若手社会学者のためのワークショップの参加者自身が若手社会学者ネットワーク(JSN)を組織した。それ以来、彼らは、2008年のバルセロナでのフォーラムや2010年のヨーテボリでの世界社会学会議において、若手社会学者向けに特別セッションを主催するなど、メンバーのための活動を活発に行っている。しかし、他と同様、彼らもセッションの運営や世界的なイベントにおける参加者数を引き上げることの困難に直面している。それゆえ、彼らはより多くの支援を必要としているし、ISAの世界的なイベントとさらに一体化することを望んでいる。

電子調査やJSNメンバーのインタビューに基づいて、分科会は、ISAが以下の行動をとるよう提言した。

1. ISAの世界的なイベント(例:ISA2012年ブエノスアイレス・フォーラムや横浜での2014年世界社会学会議)において、初期キャリアの社会学者がISA幹部や他の先輩、重鎮の社会学者と集えるレセプションを開催する。
2. JSNが企画するセッションを、ISAの世界的なイベントの会議プログラムに入れ込むべきである。
3. 初期キャリア社会学者のためのキャリア発展セミナーやワークショップ(例:査読誌への投稿方法、レビュー論文の書き方など)をISAの世界的イベントのプログラムに常に入れること。
4. ISAの強力なリーダーシップで、リサーチ・コミッティ、テーマ別ワーキンググループ、ナショナル・アソシエーションや他の団体メンバーに、特にISAの会議、フォーラム、大会の際には、初期キャリア社会学者を積極的にサポートするよう促す。(ISAの財務・会員委員会の調査結果によると、実際、大半のリサーチ・コミッティ、テーマ別ワーキンググループは、BやC地域からの会員に、特にキャリアの初期段階の者に対してISA会議に参加するための渡航援助等を通じて優遇措置を講じている。)
5. ISAのPhDラボや若手社会学者の世界コンペの主催者が、参加者に対してISAの会員になるよう積極的に働きかけるべきである。
6. 何らかのISAのイベントに参加した初期キャリアの社会学者に関して、ISAとのつながりを維持するために事務局が追跡調査すべきである。
7. 初期キャリアの社会学者をISAに組み込むことの重要性を認識し、ISAの規則や付随定款を改訂すべきである。

この記事は、2011年3月24日にメキシコシティで行われたISA理事会において、分科会会長(エマ・ポリオ)によって報告された「初期キャリア社会学者分科会報告」の一部もとになっている。電子調査の実施に関してISA事務局のイザベラ・バーリンスカとそのスタッフ、そして他の分科会メンバーで原稿を執筆したミシェル・ヒシエ、ヤン・フリッツ、佐藤嘉倫に感謝したい。

私たちは、キャリアの初期段階にいて真にサポートを必要としている社会学者が、若者・若手では必ずしもないことから、「初期キャリア社会学者」という用語を使う。

(高見具広訳) ■

> Women's Worlds 女性の世界

by Ann Denis アン・デニス(カナダ・オタワ大学、RC05会長、前ISA研究担当副会長(2002-2006))

Women's Worlds(女性の世界)という、世界のさまざまな土地で3年に1度開催される女性に関する学際的な国際会議が、今年はケベック大学、セントポール大学の協力を得て、カールトン大学、オタワ大学の共催で行われた。会議は7月3～7日にオタワ・ガティノーで開催された。2000人の登録があり、約800人の報告者、92カ国からの参加が、この会議の国際的な広がりを見事に示している。参加者は、学界や運動家のコミュニティ出身であり、フェミニズム、女性の包摂(もしくは不在)に対して多様な理解がある。これは、対話し互いから学ばずにはいられない機会であった。

会議全体のテーマは、「つながる、意見を交わす。包摂・排除・隔離——グローバル化した世界に生きること」であった。それゆえ、多様性や国際性が前提とされた。各日にはそれぞれテーマがあった。循環を打ち破る、天井を打ち破る、地面を打ち破る——別の言葉で言うと、女性に課せられた制約への挑戦から、より包摂的で公平な未来のための創造である。こうしたそれぞれ広範なテーマのうち、セッションでは、マイクロレジットやエイズ、女性に対する暴力、女性と芸術など多くの現実的な領域に焦点が当てられた。この会議では伝統的な内容が報告されたセッション、決められた一連のテーマに関する報告者間のやり取りが行われたもの(これはプレナリーセッション共通の形式であった)、また司会者が出席者との間でテーマを絞った議論を行ったものもあり、また女性の自律性、参加の拡大を目指した主導的取組みの報告もあった。

Women's Worlds 2011の特徴は、それが3ヶ国語——英語、フラン

ス語、スペイン語で行われたことである。通訳は、プレナリーセッションに集中した限られたものだった。2ヶ国語(必要な際は非公式の通訳付き)で行われたセッションも、フランス語、スペイン語のみで行われたものもあった。また、障害・アクセシビリティへの配慮(例えば、セッションでの手話、車いすのアクセシビリティ)、若年の女性、先住民の女性への配慮がみられた会議でもあった。こうした配慮は、会議運営やプログラムにおいてははっきりしていた。それぞれのコミュニティ出身者から成る顧問グループとの相談によって促進された包括性と豊かさは、はじめから終わりまではっきりしていた。最後に、これは学界と一般社会の両者が参加し、対話を交わした会議であり、真に広範囲な射程をもっていた。

“...a rich opportunity to dialogue and learn from each other...”

「…対話しお互いから学ばずにはいられない機会…」

以上で私は、私が出席したいくつかのセッションでの選り抜きの内容よりも会議の雰囲気や少しでも伝えたいという思いから、報告の中身よりも会議の運営に注意をむけてきた。ISAのRC32 'Women in Society'のメンバーは、Women's Worlds 2011に積極的に参加していたことを再度述べたい。私たちの最近または近い将来の活動について情報交換を行うためのRC32 brown bag lunch(

弁当持ち込み昼食会)を企画したことで、WW11 バザーにおいてRC32 インフォメーションテーブルを運営したことに加え、RC32 議長Evie Tastsoglouは、広範囲で多様性に富むRC32からのWomen's Worldsへの参加者リスト(現在はISAのウェブサイトにおけるRC32のページに掲載されている)を配布した。これら全てのことは、私たちが互いに連絡を取り合い、RC32を紹介する際に役に立った。ビデオクリップ、ディスカッション・フォーラム、プログラムの全リスト(報告者・議題について期待以上に包括的な情報を得られるだろう)を含むWomen's Worldsに関する詳細については、<http://www.womensworlds.ca>を参照。Women's Worldsの次の会議は、3年後(2014年)である。私が1993年以来参加してきた4大会と同様、次回大会も示唆に富み、活発な議論を呼ぶものとなるだろう。(高見具広訳) ■

> Brazilian Sociology Goes from Strength to Strength

影響力を増すブラジル社会学

by Elisa P. Reis エリサ・P・ライス(リオデジャネイロ連邦大学、前ISA執行委員会委員(2006～2010))



クリチバで開催されたブラジル社会学会に駆け付けた多くの社会学者たち(写真提供: Elisa Reis)

2011年7月26日から29日にかけて第15回ブラジル社会学会(SBS)がクリチバにおいて開催された。およそ2,000人の社会学者が、革新的な都市化計画の成功事例として知られるパラナ州の首都に集い、「変動、連続、社会学的挑戦」という大会テーマで議論を行った。

ブラジル社会学会会長チェリ・スキャロンの開会スピーチで、社会学はわれわれの歴史的コンテクストから絶えず挑戦を受け続けていることへの考慮が述べられた通り、この大会テーマは、われわれの公的役割を果たすため、この大会を機に参加者とともに、これまでの理論的・方法論的資源の棚卸しを促すものであった。ブラジル全土の社会学者と数名の外国籍の仲間を交え、大会委員会は驚くほど多くのテーマとアプローチを組み合わせ、実り多い対話をもたらした。基調講演の登壇者によって提示されたさまざまなトピックは、幅広い問題群をカバーするものであった。マーガレット・アーチャー、セイラ・ベンハビブ、ロバート・マーレ、トム・ダウヤー、ワーネック・ヴィアンナ、マリア・ナザレス・ワンダリーは、理論・方法論・政治に

かかわる活発的な討論にインスピレーションを与えた。

このたび、生涯業績賞(life-time career prize)を授与された2人の社会学者の1人であるワーネック・ヴィアンナは、「社会・政治・法」という受賞演説のなかで、古きブラジルの権威主義から近代への道程と、わが国のここ数十年にわたる民主化の経験について、その課題の実現にかかわる法制度と手続きとの関連で論じた。もう1人の受賞者であるマリア・ナザレス・ワンダリーは、地域社会学の理論的・政治的問題について講演を行った。

大会プログラムには、6つの基調講演と、7つの特別セッション、7つのフォーラム、3つの特別講演、31のラウンドテーブル、そしてRC32によってによって組織された複数のセッションが組まれており、そのほかにも膨大な学生ポスターセッションといくつかの文化活動も行われた。だが、これら途方もない規模のプログラムにまさって刺激的だったのは、熱心さといへんなコミットメントをもって議論を活気づけた、実に多くの若い教員や院生

の存在であった。

先駆的な社会学者の小集団によって1950年に設立されたブラジル社会学会は、これまで長い道のりを歩んできた。政治的混迷期を経て生じた1970年代後半の民主化の兆しは、ブラジル社会学会に新しい活力を与えた。それ以降、ブラジル社会学会は、会員拡大と学会運営において持続的に成長してきた。ブラジル社会学会の前事務局長であった私は、1980年代以降の学会の活動に注目すべき進歩を見出している。第15回大会を通じて明らかにみてとれたものは、ブラジル社会学が全盛期を迎えており、それぞれが国家のコミットメントを自覚しながら学会活動を支え、そしてそれぞれが研究者のグローバル・コミュニティの一員であることを誇りに思っている点であった。(福田雄訳) ■